

<特集>

それぞれの視点からの東京2020パラリンピック —みる・ささえる立場から—

井筒 紫乃¹⁾, 伊東 千恵子²⁾

筆者は、2018年、脳梗塞を発症し、その後遺症による、障がい当事者として、パラリンピックを観戦した。オリンピック同様、無観客試合のため、インターネット配信による、障がい者の熱戦を観ながら、思ったこと、感じたことを、綴っていききたい。

I. 障がい当事者としてみたパラリンピック(井筒)

1. パラリンピックとは

日本パラリンピック委員会¹⁾(JPC)は、パラリンピックについて、障がいのある人々が、医師や体育指導者により「治療体操」としてスポーツが行われるようになった歴史的背景があり、「パラリンピック」という名称は、「paraplegia (対まひ者)」の「Olympic」=「Paralympic」という発想から、1964年の東京大会の際に日本で名付けられた愛称であったと記載している。また、IOC(国際オリンピック委員会)²⁾は、1985年に「パラリンピック」を大会名として用いることを認めた。大会の意味を「ギリシャ語のPala(英語のParallel(平行)の語源)+オリンピック(Olympic Games)」とし、「もう一つのオリンピック」として再解釈することとした。

2. 障がい者当事者としての気づき

新型コロナウイルスの影響で1年延期されたオリンピックに伴い、パラリンピックも1年延期となったものの、2021年8月24日、東京において開催された。

筆者は、2018年、脳梗塞を発症し、その後遺症による、障がい当事者として、パラリンピックを観戦した。オリンピック同様、無観客試合のため、インターネット配信による、障がい者の熱戦を観ながら、思ったこと、感じたことを、綴っていききたい。

パラリンピックに出場する選手には、脳性麻痺のよ

うに、先天的に障がいを抱えている場合と、脊髄損傷者のように、事故などによって、後天的に障がいを抱えた選手が存在する。先天的にせよ、後天的にせよ、パラリンピックを目指し、スポーツに関わる意志をもつまでに、乗り越えなければならない壁について、考えてみる。

1) 1つめの壁

中途障がい者がスポーツを始めるには、障がい受容という壁があると考えられる。障がいの受容については、多くの著者が定義しており、岡本³⁾は「あきらめでも居直りでもなく、障がいに対する価値観(感)の転換であり、障がいをもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではない」と述べているように、障がいをもつことを自分なりに受容し、スポーツに価値観を見出していくことによって障がい受容という1つめの壁を乗り越え、パラリンピックの日本代表に選出され、それぞれの種目において、あの、パラリンピックの舞台に立ったのではないだろうか。

2) 2つめの壁

中澤⁴⁾は、「パラリンピックアスリートは例外なく身体のいずれかの部位に障がいを有している。そして例外なく勝つため、記録を伸ばすために高いモチベーションをもってトレーニングに励んでいる。」と述べているように、強い精神力をもち、トレーニングをおこなうことが、乗り越えた2つめの壁であると思われる。

次に、パラリンピックを支える立場で、車いすラグビーのボランティアとして参加した、本学の卒業生でもある伊東千恵子氏の活動について、報告する。

II. ささえる立場からみたパラリンピック(伊東)

「ボランティアに参加した動機」

私は、日本女子体育大学卒業後、国立障害者リハビリテーションセンター学院リハビリテーション体育学科(以下:リハ体)に進み、2年間障がいのある方への運動を用いて行うリハビリテーションを学びました。卒業後、高齢者の介護職や、中学校の支援学級の教員補助員など様々な仕事に就きました。母校である国立障害者リハビリテーションセンター(以下:国リハ)病院のリ

¹⁾ 日本女子体育大学健康スポーツ学科・教授(専門:発育発達論)。1982年アジア競技大会・陸上競技女子3000m 3位、ユニバーシアード・陸上競技女子10000m 6位。2018年脳梗塞のため左片麻痺の身体障がい者となる。

²⁾ 鈴木慶やすらぎクリニック外来リハビリテーション科所属(専門:障がいのある方および高齢者への運動指導)。本学(在学時モダンダンス部)および国立障害者リハビリテーションセンター学院を卒業。

ハビリテーション部門リハビリテーション体育で、数年間非常勤として働きました。日頃からパラスポーツに関わる機会は多くありました。そして、2020年、オリンピック・パラリンピックが、東京で開催されることが決定し、パラリンピックに是非とも関わりたいという強い思いから、個人として、大会ボランティアに応募しました。

1. 活動内容

ボランティアの活動内容や、担当種目などは、応募時の登録内容や希望などを踏まえ、大会組織委員会が決定し、それぞれにオファーが送られました。

私は「フィールドキャスト」の「車いすラグビー」の担当となりました。車いすラグビー日本代表チームの選手の中には、国リハで関わりがあった選手が数名おり、また監督の通訳は、リハ体時代の同期でした。これらのことから、人の縁に喜びを感じたフィールドキャスト車いすラグビー担当でした。フィールドキャストの具体的活動内容は、試合会場とウォーミングアップ会場での、ボール係（ボーラー）やモップ掛け（モッパー）、ボールや椅子、テーブル等の消毒作業、試合開始の選手入場時の国旗の旗手等でした。コロナ禍ということもあり、ボール等様々な物品の消毒作業

は綿密に行われました。活動場所は、選手と近いこともあり、感染対策として選手エリアとボランティアエリアに分かれていました。選手とは2m以上の距離を保たなければならず、必要以上に声をかけてはならない状況でした。そのような状況の中、選手やスタッフの方々から何回も「Thank you」と声をかけていただきました。

無観客の、静かな国際大会ではありましたが、選手やスタッフの温かさを感じられた大会となりました。（図1）。

2. 車いすラグビー

車いすラグビー⁵⁾は、上肢と下肢に障がいがある方が行うチームスポーツです。

カナダで考案され、2000年のシドニーパラリンピックから、公式種目に採用されました。車いす同士のタックルが認められている激しいスポーツです。

障がいの程度によってポイントが与えられ、障がいが軽いとポイントが高く、障がいが重いとポイントが低くなります。障がいの程度が軽いハイポインターは、車いすをスピーディーに操り、ゴールへ、ボールを運びます。障がいの程度が重いローポインターは、相手の選手の動



車いすラグビーピクトグラムと筆者（伊東）



ボーラーの様子



ボール



モッパーの様子



旗手（筆者）



ウォーミングアップ会場



試合会場



会場を彩る朝顔の鉢

図1. フィールドキャスト活動内容



図2. “車いすラグビー、はじめてガイド” (画像提供：日本車いすラグビー連盟)



図3-1. 授賞式

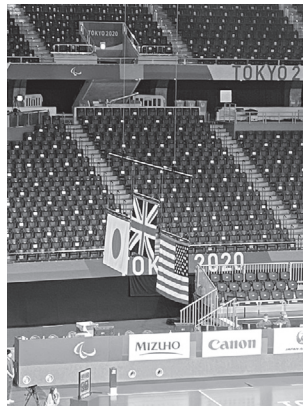


図3-2. 授賞式と国旗



図3-3. 銅メダルとビクトリーブーケ

きを止めて、ハイポインターの進路をつくります。

一人一人が与えられた役割を果たすことで、得点が得られるスポーツです。(図2)

日本代表チームは、素晴らしいチームワークで一人一人が役割を果たし、見事銅メダルを獲得しました。(図3-1～図3-3)

3. パラスポーツと共生社会

ボランティアの中には、車いすラグビーを初めて知ったという方が多く見受けられました。車いすラグビーに限らず、パラスポーツは、普段目にするのが少ないスポーツであると思われます。競技人口に加え、練習場所が限られているなどの環境面の問題もあると思われます。その為、必然的に、障がいのある方が、パラスポーツに出会える機会も少ないと考えられます。

スポーツは、一定のルールに則って勝敗を競い合い、楽しみを求めるものだと考えます。そして、障がいのあるなしに関わらず、スポーツは、ルールにおいて、皆平等です。

東京パラリンピック後、スポーツ庁⁶⁾は「障がい者スポーツ推進プロジェクト」を打ち出し、障がい者が、スポーツを楽しむことができる環境整備と、障がいのあるなしに関わらず、スポーツを一緒に楽しめる環境づくりをすすめるとしています。

今回のパラリンピックで注目を集めた「ポッチャ」は、ボールさえあれば、どこでも、誰でもができるパラスポーツです。そして現在、学校教育の現場で取り入れるムーブメントが起きています。今後、老若男女、障がいのあるなしに関わらず、同じ場所で、一緒にスポーツを楽しめる活動が増えていくことを願っています。

4. おわりに

ある選手が「ゲームをしている時は、思い切り自分を出すことができている」と話されていました。スポーツは、ルールの元、皆平等で、それぞれが力を出し切り楽しむことができる場の一つです。障がいのあるなしに関わらず、好きなことを行い、自分自身が輝ける場をもつことは、生きていく上で、大切なことだ

と思います。スポーツは、輝ける場を提供できる貴重なツールの1つだと考えられます。

III. まとめ (井筒)

中途障がい者となって東京2020パラリンピックを観て、障がい当事者として、感じたことと(井筒担当)、車いすラグビーのフィールドキャストとして、実際に、パラリンピックに関わった報告(伊東担当)の2部構成である。掲載されている画像の一部は、伊東氏が撮影されたものであり、現場に入れなければ、知ることができない、貴重なシーンである。

パラリンピックによって起きたムーブメントを、障がい当事者として、誰もがスポーツを楽しむことができる環境づくりを、体育大学だからこそ、できることがあるのではないかと考え、今後も活動を進めていきたい。

謝辞

東京2020パラリンピックのボランティア活動に気持ちよく送り出してくださった、職場と家族に、感謝申し上げます。(伊東)

参考文献

- 1) 日本パラリンピック委員会 <https://www.parasports.or.jp/paralympic/> 2021年12月5日
- 2) 国際オリンピック委員会 <https://olympics.com> 2021年12月5日
- 3) 岡本五十雄: 障害受容(克服)—脳卒中患者のこころのうち—, Jpn J Rehabil Med, Vol.50:951-956. 2013.
- 4) 中澤公孝: パラリンピックブレイン—パラアスリートに見る脳の再編能力—.
- 5) 一般社団法人日本車いすラグビー連盟 <https://jwrf.jp/> 2021年12月13日
- 6) スポーツ庁 <https://www.mext.go.jp/sports/> 2021年12月13日